

児童健全育成賞（数納賞）佳作

「すくすく」伸びよ 話・和・輪の中で

福岡県 筑紫郡

那珂川町ふれあいこども館 副館長 井口 セツ子

自然と笑顔の那珂川町は、福岡県の西部に位置し脊振の山々に囲まれ清流那珂川の流れは福岡市から博多湾に繋がっている。この川を挟んで、住宅地がある。面積74,99km²の細長い町である。自然と生きて来たこの町の人々はおおらかで優しい人が多い。平成26年11月現在人口50,186人。あちこちに「市になろう」の旗が立っていて発展途上ではあるが、昔ながらの情景が残り来訪者にも「ほらこれもっていきんしゃい」と声をかけ地域の繋がりが強い。又移住者を温かく受け入れる気風もあり自然の恵みを享受している、それに福岡市にも隣接して生活するには最高の場ともいえる。

私は昭和46年2月、町内で初めての保育施設である町立那珂川保育所で勤務することになった。経験ありという事で主任保母(後所長)を命じられ、保育所の責任を担うことになった。

町内には町立の幼稚園が3ヶ所あったが、「保育所は？」という感じがある中、保育所利用の必要がありそうな家庭を、役場の担当者と訪問し新設する保育所の内容を説明して理解を得、4月定員は60人に36人を迎えて入園式をした。

社会情勢は高度成長期とあって働く母親が多くなり、保育所の利用者もふえて49年には2ヶ所目の町立中央保育所定員120名(現在190名)が開所された。ここは福岡市より離れた閑静な所にあったが九州新幹線開通による車両基地が出来て転入者が多く、「博多南駅」から新幹線を

利用して博多まで10分で行けるこの町は、福岡市のベッドタウンとして急速に発展していった。のどかな家庭環境が多かった中、基地に全国から集まった家庭は大半が核家族であり子育て中の親も時代の波に乗って左右され、育児不安や虐待、家族崩壊とその煽りが子供たちに影響した。

私は、保育所に通う子だけでなく町内の在宅乳幼児が83%という全体の実態を把握し保健センター婦人会役員、民生委員、地区の区長とも話し合った。当時町内には、私立保育園2ヶ所、公立2ヶ所の4ヶ園(現在は6ヶ所)があり、一括した子育ての取り組みの必要性を考え、公私立の所園長会を開き、在宅児の実態を説明。町内4ヶ所の公民館に保育士を派遣して地域との交流を深める事を提案し『公開保育』を始めた(現在も持続)。

同時に平成7年「那珂川町保育所連盟」を立ち上げ、初代の会長となって町内の乳幼児の健全育成を目標にし施設を開放して月1回『公開保育』を提案し決定した。(現在も継続)。この公開保育の場で親同士のグループが出来サークルが起ち上がった。名称はママキッズ『サークル活動』はここから始まった。仲間は15人位にふえリーダーは、町内の施設を利用して、誕生会や運動会クリスマス会等催しを行なった。育児サークルの難問はいつも会場を確保することでありその都度相談を受けた。行政にはこれから

は「子育て支援が重要な課題」と提案し平成8年～10年は、保育室や図書室を提供した。参加者は増えるばかり。当時中央保育所は9ヶ所の保育室。2歳児を広い保育室に移す等クラス編成を工夫し保育室を空けて平成11年度からここで支援事業をはじめた。この計画は決裁を取り、即広報や回覧板で町内に知らせた。部屋のネーミングは職員の意見で「すくすく」と決定。提案事項に対し仲間が目標を駆使し時宜を得た将来に向けた取り組みに対し柔軟な考えで賛同協力してくれた。私はよい仲間の支えに恵まれていた。

『保育室で始めた子育て支援』平成11年4月6日（火）晴 平成8年頃から支援事業の一環としてやってきた支援活動は新たにここから始まった。子育て支援センターすくすく初日は0歳1名、1歳10名、3歳8名、4歳1名、計20名の親子が参加。担当者は勿論参加者の親子の喜びは語り尽せない。職員も次々に教室をのぞき参加者に挨拶を交わしていた。この日の日誌を見ると胸が一杯になる。

担当者は2名の職員を選んだ。又同年より電話や面接で育児相談も受けた。子育て支援がこの数年の間はかなり浸透してきた。相談の内容は家族の問題、子どもの発達、夫婦間の意見の相違など、主に悩みを話す相手がないことが主で、只聴くことで親はほっとされる事項が多かった。

支援事業開始の日誌には、所長として「ここから始まる子育て支援。親の姿から様々な取り組みの展開を考慮し職員一丸となって時代に即応した保育に対応しましょう」と訓示したと記録している。支援の状況等は折にふれ福祉課に連絡しその度に勇気つけられた。日々成長している子ども。待っていては間にあわない。気が付いたことから取り組んで徐々に整備していけばよいと私は考えた。職員が事務室でぼんやりしている私に「先生今度はどんなことを考えておられるのですか」と問うてくれた時、何かを提言すれば職員が色々な意見を出し「よしやってみましょう」と知恵を出し合ってくれる。こ

んな職員のお蔭でいつも勇気を得てきた。

保育所の運動場では職員も在園児も、すくすくの子を、何の抵抗なく仲間に入れてくれた。しかし親の中には子どもから目を放し、自分はゆったり座っていたり、寒い時等外に出たがる子供の気持ちより自分の気持ちを優先する親子もはお任せの感じで子どもの遊ぶ姿に反応しない笑顔のない親もいた。ところが朝の体操だけは一緒にしている。この姿を見て「ハッ」と気が付いたことは、体を動かせば心も動く……と思い、たまたま日本エアロビクス協会の幼児の指導にぴったりの先生を知っていたので、依頼し保健センターのホールで、リズム体操やパラシュート等で遊ばせ親子の状態をみると、まあなんと子どもは勿論親が喜び見たこともない笑顔。親が弾めば子どもも弾む。母親の意見を聞いたら「是非またして下さい」の声。予算がないので参加費1回100円（現在は200円）この『親子リズム』は月1回。現在も持続「子育ては親育て」と思った。「親がかわれば子どもが変わる子育てをみんなで楽しみましょう」と通信に書いていた。

この頃には「那珂川町の子育て支援センター」の話は広まり周辺の市などから視察があった。中でも隣接している市からどこに意識の違いがあるのかと係長が23名も揃って視察こられた。意見交換しお互い研磨して行きましょうと意気投合した思い出もある。10月には石川県議会(10名)の視察をうけた。子供たちの歌や視察団が親と話をされる場面もあった。どこからの視察も決まって「どうすれば広がって行くのか」と質問をうけた。親と信頼関係を持ち、子育てに疲れた親が、ほっとするような雰囲気を保つことと、町や地域等様々な機関に子育てに関する情報を提供してみんなの理解や力を結集すること等答えた。

私は子どもの成長を巡って親と一緒に、成長を見守り様々な経験を頂き又地域の方とも親密な関係を持つ事が出来た。恐れ多い言葉だが「保育所に行けば井口先生が何でも相談にのってくれる」と聞いて訪れて下さるも方あり支援活動

も人から人に口込みで広がり浸透していった。毎日1～2件の相談を受けながら育児書にはないその子に応じた話をしたにすぎなかったが相談に来られた親とはすぐに仲良くなれた。相談は正しい答えは出さなくともその相談を受ける心得は習得しておかねばならないと考え「福岡命の電話」で学ぶことにした。

平成8年9月事務局に職歴、人物推薦状(学校の恩師より)をもって、面接を受け認定資格講習会に2年間通った。1ヶ月に2回。しかも合宿研修等もあり、当初受講者は23名程だったが終了時は17名になっていた。1年目は主として講義。弁護士、医師、福祉関係大学の教授などの講義を受けとても貴重な内容だった。2年目は実習。相談員同士又は先輩、指導の先生を相手に相談を受ける研修。いつも緊張して手に汗の出る思いだった。

2年終了して、相談員の資格認定証を頂き『福岡命の電話』に関った。昼間は保育所、夜は命の電話。しかし命の電話で知り得た事は今までに想像に及ばぬ事ばかりで全く井の中の蛙だったことに気がついた。一番身についたのは月1回は相談の受け方のテープを、10人位の先輩や指導主事、学識経験者の方にきいて頂きいつも厳しい指摘を受けた。その度に緊張したが指摘を受けなければ気が付かないことばかりだった。「聞くではなく、聴く(十四の耳を傾けて聞く)」と教えて頂いたことが今もポイントだと心得ている。

保育所の行事が重なる時は大変で本来の仕事に支障があってはならないと5年目「命の電話」は辞めた。しかし命の電話で相談の基本を習得し得た事や経験が今役にたつことが多い。

保育所も(当時)160人の定員では待機児が多く、行政とも今後の対策を検討する話が度々持ち上がった。センターも参加者の受け入れの対策として保健センターのホールで1ヶ月1回『出前保育』を実施することになり、保育士2名が対応、出産前の親のアドバイスは保健センターの担当。離乳食の指導は、保育所の栄養士で行うようにした。

保健センターでは参加数制限なしだったので45組を超した。(現在も継続)11年度は1,711名12年からは登録制にして月2回の参加可能。初日4月4日は21人の参加。親子42人保育室いっぱい。参加申し込みは数日の内に埋まりキャンセル待ちという有様。毎日朝の歌から始まりゲーム、親子遊び、制作など色々。一番気がかりなことは多くの集団を受け入れ火災などの避難対策又事故への配慮に注意を促し保育所の訓練に参加させた。

広報からはセンターの速報はありませんかと連絡ある有難さ。参加者は広報やすすく通信で情報を知った人、友だちに誘われた人が多かった。又町内の小児科医とも連携を持ち感染症の流行等の情報を得て注意を呼びかけた。

折々にアンケートを取り親の思いを聞いた。年齢に応じた発達等の意見もあったので『年齢別討論会』の必要を感じ開催。0歳児から3歳児の4グループに分けて保育士が入り親の意見を下に年齢に応じた子育てを考え「あせらないで子どもの成長を見守ろう」ということで終了。当日の参加数39名。

県内県外の視察も次々あった。「どうすれば広がるか」といつもの質問。親の考えを聞くアンケートを参考にしている事も答えた。言葉の遅れは「ことば相談室」「子育ては支援センター」とそれぞれの専門分野で対応。8月には、社会教育課で乳幼児学級を計画され、支援センターから講演に出向いた。身近な子育ての現状に親はほっとされた様で当日82名の参加者から次回も是非と言葉を頂いた。

視察や取材も多くなる中、財団法人福岡県地域福祉財団振興基金より発行されているHエンゼル情報誌に掲載又テレQの取材で支援の様子を母親にインタビューされた。ここで母親が答えた言葉「遠くから那珂川町に来て、知らない人の中で心細く子供と過ごしていましたが、支援センターで友だちもできました。ここは本当に子育てしやすい町です」と答えた。子育て中の親でなければ出てこないこの言葉は強く心に響き感動した。

それから私は「子育てしやすい町」というようになり又大きな目標を頂いた。

次々に受ける視察の中「何で子育てなどに支援の必要があるのですかね」との問いに答えなかった。子育て支援は奉仕活動ではない。町の活性化に繋がり子育てこそ町づくり国づくりの根幹である。時代を担う未来の力、源であると力説したい思いになった。

平成12年度は相変わらず毎日25組以上、保健センターの公開保育は50組となり、担当者はその大変さを報告してきた。私も今年度で定年ということもありアンケートを取り後がやり易いようにと施設整備を町に申請していた。町も保育所職員の熱意と希望を受け止めて、何処かに支援センターの場を見つける為動いて下さった。

私たちが一番望んだのは保育所横の畑にセンターを建てて頂きたいという夢だった。行政の動きは素早く地主に何度か相談したが交渉困難とのこと。ここまで力を入れて理解して下さる行政に只有難く感謝した。施設を運営していくには地域住民の方々との連携が最も必要であり、地域の人との信頼関係を保つことである。保育所周辺の方にはとても恵まれ、花を届けて下さる、散歩する子どもに声を掛けて頂く等、みんなの保育所という感じで交流があった。

保育所の行事には、地域の方を案内した。特に餅つきはお年寄りが自分たちの出番と薪を持ち寄り、割烹着姿で餅つきの道具を持って朝早くから集まって大賑わい。こうした状況の下、私も地主さんの家に伺い「町内の子ども育成の為にご尽力をお願いします」と相談したら「よし、分かりました」と返事を頂いた。翌朝当町の担当者が地主の下に伺って話は成立。

平成13年に向け支援センター建設に取り組みが始まった。振り返れば、狭い中で視察や相談を受け子どもの成長を見逃さず大切にしながら親の希望にも耳を傾けていく。その中で新しい取り組みを考えた職員のアイディア。みんなよく頑張った。そして迎えた平成13年3月31日最後の勤めの日になった。「お疲れ様」と迎えに来た長男(当時40歳)と、みんなに「本当にお世

話になりました」とお礼を言うと胸がいっぱいになった。事務所を出ると運動場にも門の前にも帰りの道にも保護者や卒園生、役場の職員、保育所周辺の住民の方が長い列で見送って頂き有難くてお礼の言葉がなかった。当日は子供達の家族が温泉で食事会をしてくれた。その場まで障害児の保護者からお礼の電報が届いた時は、勤務の中でした当たり前の事と思いながらも涙が止まらなかった。自分の性格は情に脆いのが長所でもあり短所でもある。よく笑って過ごさせて頂いた保育所生活だった。

「支援センター」の建設は4月に始まり9月に完成したが、障害者のスロープがないと許可が下りず開所は10月からになった。「完成したら新しい支援センターに嘱託で勤務して下さい」と有難い電話を頂いたが「これからは若い人の出番です」と断っていた。しかし再三「10月から出勤して下さい。貴女が計画したセンターですよ。しばらく手伝って下さい」と言われて、よしやろうという気になり再び勤務させて頂く事にした。

12年度参加数 5,852名

「子育て支援センター開所」は、平成13年10月2日(月)晴れ。職員2名。嘱託1名の3人体制。この日か又新たな気持ちで何としてもセンター充実に取り組みたいと心引締め出勤。先ず入り口で手を合せ、この中で過ごす子の安全を祈った。そして用意してきた花をトイレや下駄箱の上彼方此方に飾り幼児を迎えることにした。敷地面積657,38 m^2 建坪133,22 m^2 。屋外には滑り台や砂場もある。新しい香り。トイレも幼児向け。可愛い下駄箱。建築に携わった会社から花も頂いた。みんなが待ちわびた夢のセンター。どんなに喜ぶだろう。どんなに輪が広まるだろうとワクワクした。何より又呼んで下さった事を感謝せずにはおれなかった。保育所の職員も来て喜んだ。地主さんも地域の方もみんな来て「よかったですね」と喜んで下さった。当日の参加者は15名。相談2件だった。

ここから新しい支援センターの事業がはじ

まった。午前中はすくすく広場。午後は主にサークル活動、相談、保育所入所4ヶ所の面接も行ったので空くことはない。しかし私はここを訪れてくれる方々に、肩を張らず、ありのままに接していれば何時かは何かが見えてくるはずと考えていた。朝は駐車場や庭の清掃から始まり室内のおもちゃ等衛生点検してみんなを待つ毎日だった。11月中旬中学生が家庭科の授業で27名がセンターに来て子どもたちと遊んでくれた。双方共とても楽しそうだった。引率の先生が学校では見たこともない笑顔で生き生きしていますと言われた。久留米医学部看護学科学生2名の実習受け入れ。中学生や実習生からも学ぶことが沢山あった。花壇にはチュウリップやスイトピー等春の球根を沢山植えた。コンサートや子育て講演会をして利用者の意見を聞くため、アンケートをとった。保健センターを借りて託児有で栄養士から「野菜を好きになろう」と調理実習試食会をした。とても好評だった。寒くなり雪が降っても雨が降っても「ここが一番」とセンターに来る人は絶えない。しかし気になったのは1~2度来てすっかり来なくなった親子の事。電話で連絡するととても喜んで又来るようになった。2月福岡県地域福祉振興基金に子育て1、2、3に次年度の支援取り組み等を申請していたら計画書と予算書などの問い合わせがあった。町の担当者、各保育所(園)長、保健センターに集まって頂き次年度の計画について意見を拝聴。いずれの場合も支援を実施する主幹としての実施を踏まえた計画は、センターで企てておく事だ。

平成13年度 参加数6,658名

平成14年度からは、保育士1名 嘱託1名で運営し、イベント等必要な時は保育士を1名追加で対応することになった。『すくすく通信』300部。午後の時間を利用するサークルの活動が月毎に増えていった。この「サークル」をまとめる事により円滑な活動が展開出来ると考え、4月各グループから2名出て頂きサークル代表者会を開いた。「サークル名」もバライティに富み、

ピッコロ、ママキッズ、楽々子育て学習会、うるおい、たんぼぼ、ピョンタン、くまさんのおうち、チュウリップ、ピクニック、みゆきグループ、サラブレット、オレンジ、双子の会等、後には25のサークルになり大きな輪が出来た。会長、副会長、会計などがきまり月1回会議を開く事となりみんなの力が大いに発揮できる輪が広まりやる気満々になった。

センターからはサークル活動の簡単な心得、例えば新しい加入希望の申し込みがあったら温かく迎え入れる事にしましょう等も定めた。こうして楽しい年間計画はみんなの力で大きく膨らんだ。『ブックタイム』は、当時イギリスのパーミングガムで識字率の低下や子どもの活字離れが大きな社会問題となり本を通してあかちゃんと親が楽しい時間を過ごすことを応援する事業などが始まった事を知り、本に親しみを持たせることの重要性を考えていた折だったので早速町や保健センターと話し合い、10ヶ月児検の中でこの事業に取り組むことを立案。その為には、読み聞かせの『ボランティア』の養成が必要である。読み聞かせボランティアの募集をしたら32名の希望者があった。研修は4回(内3回は必ず受講)実施。内容は保護者とのコミュニケーション、ボランティアの心得等。4回目の終了の日には町の担当から一人ひとりに資格証を手渡してみんなで記念写真を撮った。10ヶ月の子には、町から絵本をプレゼントするという事になった。現在も持続しすっかり定着している。

こんな中嬉しいニュース。福岡県地域福祉基金に提出の計画に、14年度30万円の委託対象との連絡があり、町やサークルに伝えた。よし、この委託金をみんなの意見を入れ大切に使用して頂き、又一段と大きな輪を広げようと考えた。会計係はサークルの会計2名に委託、通帳を作り支出を誰が見ても分かるようにした。イベント等行うときは、参加者の受付名簿、状況がわかる写真、通帳の写し等を記録として綴じる。年度末には冊子を作り報告書を提出した。我ながら満足する内容の深い大きな成果だったと思った。

平成15年度、平成16年度は支援事業の取り組みが福岡県内でも増え支援委託の申請も増えたため15万円になったが、計画的に且つ有効に利用させて頂き潤いが倍増した。この15年16年度についても、計画書、収支決算書、イベントの様子や当日の参加者名簿を綴じた内容の深い、子ども達の喜びが伝わるような報告書を提出した。支援センターには町からも予算を頂いていたので監査員が突然来られて予算執行や他の書類を見て行かれたが何ひとつ問題なし「大変です。頑張って下さい」と労いの言葉をかけて下さった。

支援センターを訪れる親子の中には何組か新しい参加者がある。人から人への口こみが多く、振り返り考えてみるとこの新たな親子への関わりを大切にしたいことに繋がっていったことが輪を広げていったように思う。職員が私の真似をして「はいよかよか(博多弁では、いいですよの意味)って言って下さいませよ。あの言葉でみんな救われているんですよ」と言ってくれた。強制しないで親の願いにほんの一寸棒を広げてあげるだけ。規則に時間に支障をきたす訳でもない。これが支援に関わる者の姿勢ではないかと思った。しかしちょっと気を抜くと親同士でトラブルになることもあった。保護者が「何があっても心配ない。井口先生がいて下さるから」と煽て？とは思っても私はこの言葉に応じていかねばと思った。

平成14年12月8日「ノブリンiN「なかがわ」として日本遊育研究所の小嶋信之さんに来て頂く事になり、10月からサークルで計画会議がはじまった。当時はテレビの体操のおにいさんでもあり、準備の段階からとても盛り上がった。11月には町内にポスターを貼った。会場は小学校の体育館。放送の準備や会場の飾りも見事。何より助かったのは保護者の中にそれぞれの専門の方がおられた事。お父さんも本格的で当日は準備の応援団。時間になると体育館はいっぱい。初めにサークル会長挨拶、那珂川町長代理で助役の挨拶から始まった。体操のお兄さんは500人位の子どもを笑わせ楽しませみんなを魅

了された。さすがプロは凄と思った。最後にすくすくの子から花束贈呈。終わったらグループごとに記念撮影。子育てのママさんグループは受付も進行も司会も立派だった。人は幸せや感謝の思いを持つと良いエネルギーが出てくるものだと感じた。経費はポスター代(3,000円)入場代子ども100円大人200円。あとは子育て基金利用で予算執行。子どもたちの興奮はさめず「お兄～さんさようなら」と見送った。すべてが終わって午後お弁当を食べる時、親が「あ～あ楽しかった。準備も楽しかったし今日も成功したし。終わったらさみしくなった」と言った。当日は受付や荷物、乳母車の置き場所、駐車場係と大変だったのに「先生楽しかったですね」と言えるお母さん。仲間と一緒に育つ親子。忘れ得ぬ思い出や今後の勇氣にもなったことと思う。と同時に私は家で過ごしている親子へ促していかねばと思い在宅児の数値をいつも確認した。

サークルでは今回の催しを契機に次はクリスマスの計画になった。会場は中央公民館。福祉財団からの援助のお蔭でみんなが生き生きと活動へ意欲を燃やす親の姿。今も「あの頃が楽しかったですね」という親の声をきく。私も子どもの心に幼い日の思い出を沢山残していかねばとみんなのクリスマスの計画に又一役。町長にサンタになって頂く事を依頼。会場の公民館大ホールは参加者でいっぱいだった。各サークルから楽器演奏、踊り、歌、ミッキーマウスの踊り、役員はキャンドルを持ってホワイトクリスマス次々に楽しい出し物。親も子もキラキラ輝き弾んで嬉しそう。最後はクリスマスソングをみんなで合唱した。そこでよいよサンタさん登場。会場いっぱいの歓声。

新しい年を迎えセンターへの期待は大きく与えられた条件の下で支援活動を広めていくには知恵を出し合い心を寄せ合って計画を練り町中のネットワークの中心でなければならない。そのことは広報担当者等も理解がありカラーで目立つところ等お願いすると、翌月の広報は一番目立つページに掲載していただいた。『すくすく通信』も600部。当時社会情勢は米国のリー

マンショックから株が暴落等もあり世界的に不況が尾を引いて失業者が多く企業が落ち込んでいき従業員をリストラせざるを得なくなった頃、リストラの対象にはならないと夜は遅く又家に仕事をもち込む父親。子育ては母親任せという中、社会の動向は育児に影響していった。育児相談の内容は母親のストレス、子どもへの虐待などが多く、成長していく子どもの姿を喜び合う心ゆとりのない父親。わが子へ愛のない親はない。しかし子どもへかける言葉さえ見失っている父親。よし父親の休みの日『サタデーあそぼう』と題して父親参観の広場を開催してみよう。親を引き入れる為の計画は保育所職員に頼んだ。肩車、トンネルくぐり、風船割りなどして笑顔で喜ぶわが子に接する父親母親。はじめは12組だったが、又幸せな家庭に戻った。

広報に14年度から《育児相談》Q&Aを3年間毎月載せた。全町民の方に見ていただくとなると誰にも心当たりのあるような内容でなければならぬので毎月悩んだ。しかし「励みになります」など声を聞くと又希望に繋がった。翌月の広報Q&Aには父親の育児相談を書いた。『サタデーあそぼう』は現在も持続。

平成14年度8,014名

平成15年4月15日(火) 昨年植え込んだプランターの花が見事に咲きスイトピーの香りが放ち百花開く春爛漫。この日センターの前に『おもちゃ病院開業』の看板を立てた。これは物が豊富でおもちゃ物を大切にしない子等を如何にすべきかと悩んでいた矢先、町内に近所の子の玩具等を修理する方がいると聞き相談した。先生はいろんな分野に詳しくカルテや当日出来ない時は入院とされた。修理代1回100円。入院費も無料。現在も1ヶ月1回継続。おもちゃ病院で感動した事は言い切れない。このことは新聞やテレビでも放映された。現在も持続。

15年度も職員1名嘱託1名2名体制。どんな状況になっても落ち着いて穏やかで笑顔で頑張りましょうと決意した。もう視察も取材も講演依頼も当たり前ようになっていた。親も子育て

が楽しいと2~3人の子を持つ親が多くなった。国の出生率が低下する中、沖縄のある町と那珂川町が出生率が高いとの事で、当時2.8人位の状態を視察に来られた。後で聞くと総務省関係との事だった。「どうしてこんなに子どもが集まり、出生率が高いのでしょうか」と聞かれた時「ここは支援センター」だけでなく「子づくり支援センターです」と答えて笑れてしまった。この年職員を交えて「すすすす」の歌詞をつくり音楽の先生に作曲を依頼。手話をしながら毎日この歌から始めた。

「お早うヤッホーたんたんたん 明るく歌おう
チャチャカチャ みんなにこにこ元気な子
大きくなあれすすすす お手ををつないで
キュッキュッキュッ 仲良く遊ぼうトントントン
みんなにこにこ元気な子 大きくなあれ
すすすす」

持続してきたイベントも充実。

15年度参加数 14,667名

平成16年度も職員1名嘱託1名。年度の途中で職員が交代したがみんなそれぞれに関わり慣れているので何も困る事はなかった。持続してきたサークル活動や支援事業を行う中で継続していく事の大切さを感じた。16年度特に賑わったのはハロウィンで町内の大型店舗も応援。町中が大賑わいだった。リビング生活便利帳「子育て情報発信基地」には子どもだけでなく親子で楽しみみんなで知恵を出し合い支えあいながら楽しく子育て出来る環境づくりを行っている。訪れると家族的な「ぬくもり」があると書いてあった。

私は程々に身を引かねばと思い平成26年複合児童福祉施設「那珂川町ふれあいこども館」が開設されるとの事。そしてそこへ又声を掛けて頂いた。私は74歳。でも今までの経験を基に何か役に立つ事があるならと勤務に就いた。建築面積931,42㎡ 延床面積1,396.89㎡ 鉄筋造2階建て。嬉しさを隠しきれなかった。4年計画で町内の40数名の方が建築ワークショップに参加して構想を練られみんなの熱意で完成した

「ふれあいこども館」。スタッフ7名(シフト制) 他臨職10名 サポートスタッフ92名。まさに子育て支援の町である。

7月6日(日) 地域の子ども太鼓で始まった「開館式」。7月20日(日)「オープニングセレモニー(わくわく体験デー)」のスペシャルゲストには、日本のあそび歌作家、浦中こういちさんの遊びや盛り沢山のプログラムで1,200名の参加者。2階の児童館には小学生も挨拶を交わしやってくる。以前から継続の支援事業を持続しながら、新規にはサポートスタッフによる昔遊び、マジックスクール、プレパパママ講座、赤ちゃんとママの集いと盛り沢山。その中にせっちゃんの「井戸端会議」を入れてみた。第1回目は4名だったが持続し輪を広げて行きたい。11月4日国際的な昔話の研究者小澤俊夫先生の開館記念講演「昔話が語る子どもの成長」の中で昔話は古里とお話しされた。ここで遊んだ子が大きくなった時、心の古里に残るふれあいこども館になりたい。

ふれあいこども館の参加数(平日)は平均200名～350名。イベントには500名～700名。私は子育てに関わる職務程尊い仕事はないと思っています。そしておさな児と過ごせる日々感謝し「子育ての支援」に新たな気持ちでもう一度取り組み所存でいます。